

津輕弘前藩の武芸(9)

資料紹介

太田尚充

寺山家所蔵・武芸関係古文書等(4)

目次

まえがき

内容紹介

二、當田流太刀(承前)

10、當田流太刀目録六本ノ写

卷子本

表に「當田流太刀目録六本ノ写 門弟へうつさせ候時入用なり」との記載がある。

11、當田流太刀目録 一

卷子本

内容「當田流太刀表目録、同裏目録、同中極目録、同許極意目録」

12、當田流太刀目録 二

卷子本

内容「當田流太刀許極意之巻、虎口之巻」

13、當田流太刀表目録

天保九年(一八三八)二月吉日、戸田行左衛門定最より戸田八十八あて。

卷子本

浅利万之助より神茂左衛門あて。

14、當田流太刀裏目録

卷子本

内題「當田流太刀裏目録」

天保九年（一八三八）二月吉日、戸田行左衛門定最より戸田八十八あて。

15、當田流太刀中極目録

卷子本

内題「當田流太刀中極目録」

天保九年（一八三八）二月吉日、戸田行左衛門定最より戸田八十八あて。

16、「當田流劔術私手鑑」

折本

安永七年（一七七八）十月、浅利万之助より永田軍八あて。

17、當田流太刀解説書

冊子本

安永八年（一七七九）、「藤原豊貫謹書」とあるが宛名の記載はない。

18、「當田流太刀并居合・棒極意巻」

折本

最後に「安永七戌年（一七七八）十月十七日〆廿五日まで傳文濟」との記載がある。

あとがき

まえがき

当『文化紀要』第二七号（昭六三・二・二〇）の拙稿「津輕弘前藩の武芸(8)」では、「當田流太刀」に関する文書資料九点を紹介したが、今回は残りの九点を紹介する。

前回の九点は、すべて當田流太刀の原本で、弘前藩當田流初代當田甚五兵衛（後に半兵衛と改名）吉正より浅利伊兵衛均禄に授与した卷子本であった。今回紹介する九点のうち五点は写本で、浅利伊兵衛の嫡子万之助等が授与した卷子本である。従って内容は前回と重複するが「寺山家所蔵」の古文書であるのでこれを掲載することにした。残り

の四点は、資料の体裁上からは折本二点、冊子本一点、卷子本一点となるが、解説書の意味合いをもつ資料である。それぞれ本文で紹介するので吟味していただきたい。

内容の紹介

凡例

- (1) 冊子本、卷子本等の表紙に題簽(箋)あるいは外題がある場合には、その題名を「」で示した。「」のない題名は、内容その他から推して仮りにつけた名称である。
- (2) 破損や虫害が甚しく、内容の上からも題名のつけ難い場合には「題名不詳」とした。
- (3) 体裁によって、卷子本、冊子本、折本、堅紙・折紙・切紙の四種に分類した。卷子本には、表紙や軸の失われているもの、あるいは始めから軸がなかったと思われる巻き紙のような様式まで含めた。
- (4) 特定の人物、字句、事件等については、本文の後に「注」で示し、全体にわたる事柄については「解説」で説明を試みた。また、文中に「注」の必要な場合には、随時(一)に示した。
- (5) 判読不明の文字は□で示した。

10、當田流太刀目録六本ノ写

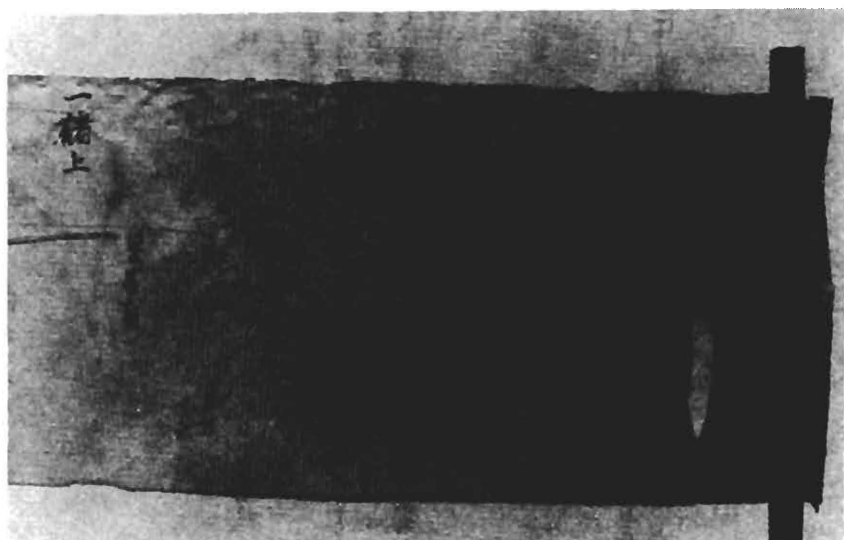
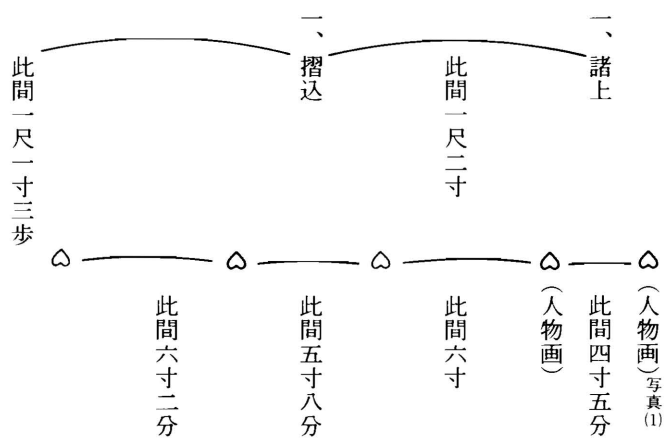
卷子本

この資料は、卷子本の形式をとっているが、芯となる軸がなく、奥巻も欠けている。また、巻頭の見返しとなる表紙裏も欠けているので正式の外題の記載はない。右に掲げた表題は、本紙の裏に記されていた名称である。なお、この表題の下に次の添え書きがある。

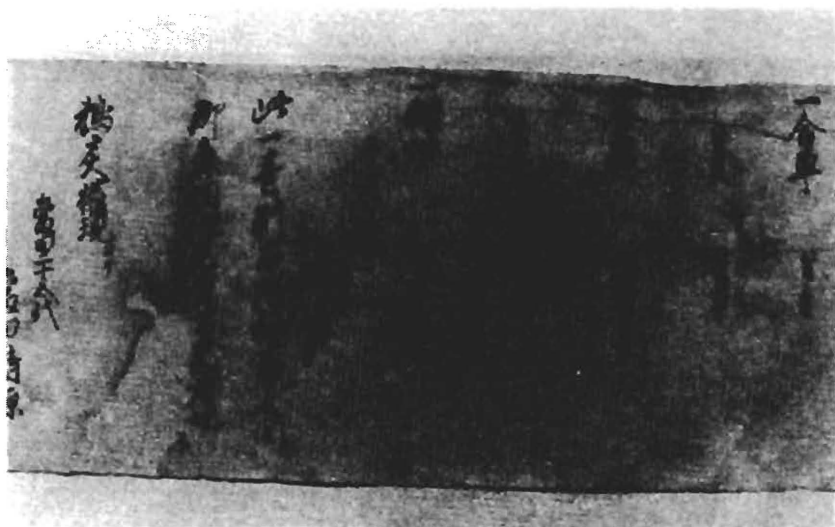
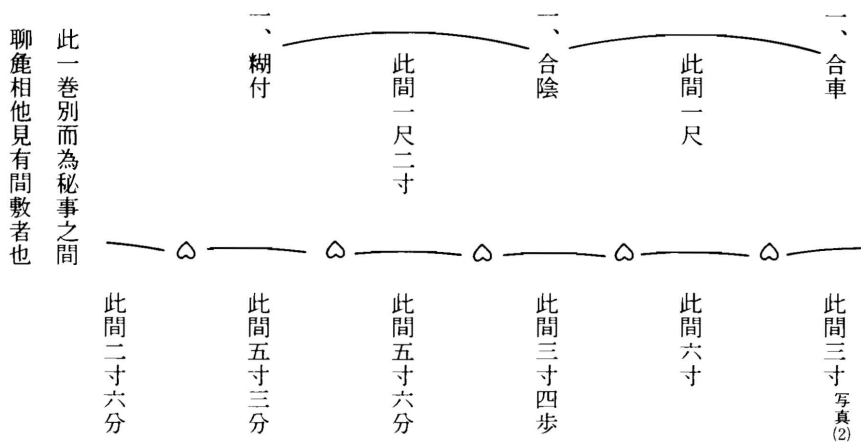
「門弟へうつさせ候時入用也」
以下次に記す。

大間組合式つき半二而吉^(續)
^(よし)

當田流太刀表目錄 一



写真(1) 當田流太刀表目錄(一)の書き出しの部分。「諸上」の人物画の間隔「四寸五分」を示す。



写真(2) 「諸上」以外の人物は「△」の符号で記し、間隔をそれぞれ示している。

鶴戸大権現ヨリ

當田二十五代

當田清源
写真(3)

當田内記

當田権右衛門尉

當田権太夫吉政

當田半兵衛尉吉正

浅利伊兵衛尉

(二七〇五)
寶永二乙酉曆

八月廿九日

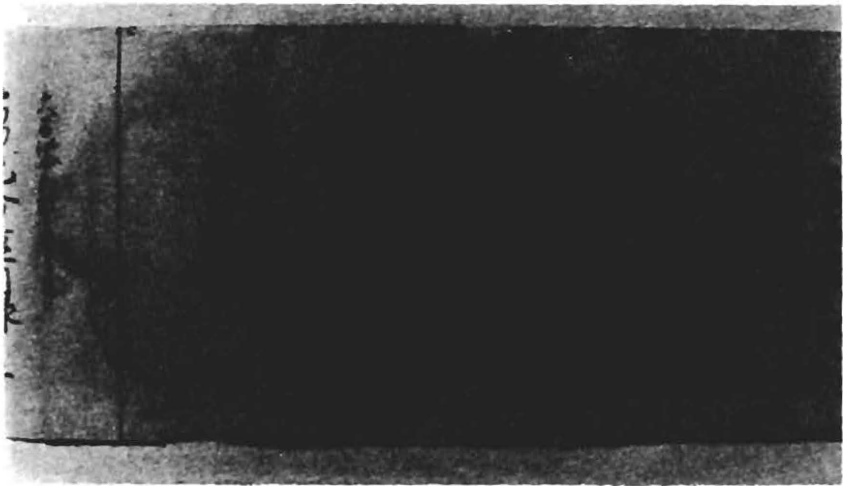
當田清源ヨリ七代

何之誰某殿

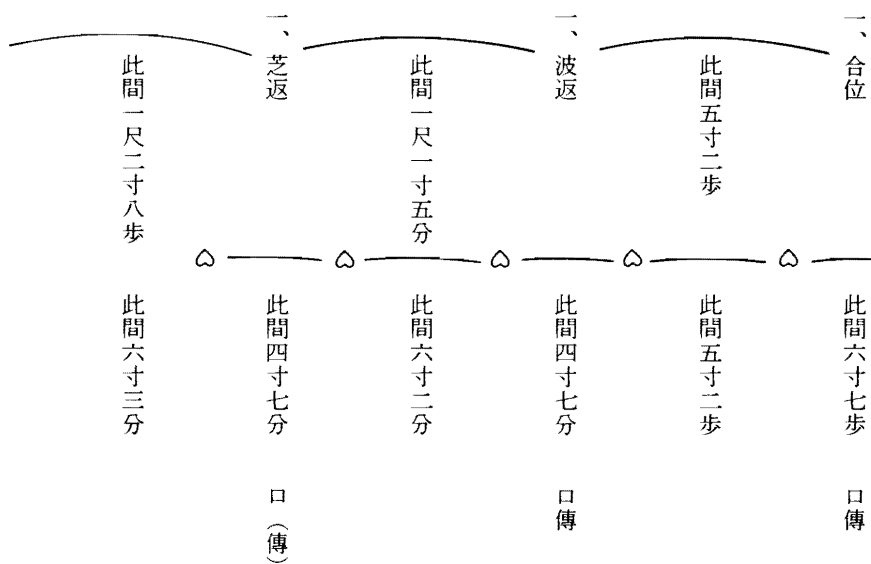
太間組合式つき半ニ而吉

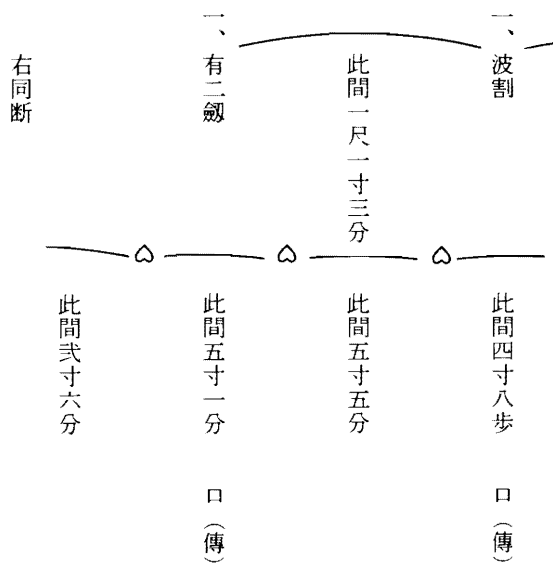
當田流太刀裏目錄 二

此間三寸二分



写真(3) 「奥書き」の部分の書き方を示す。





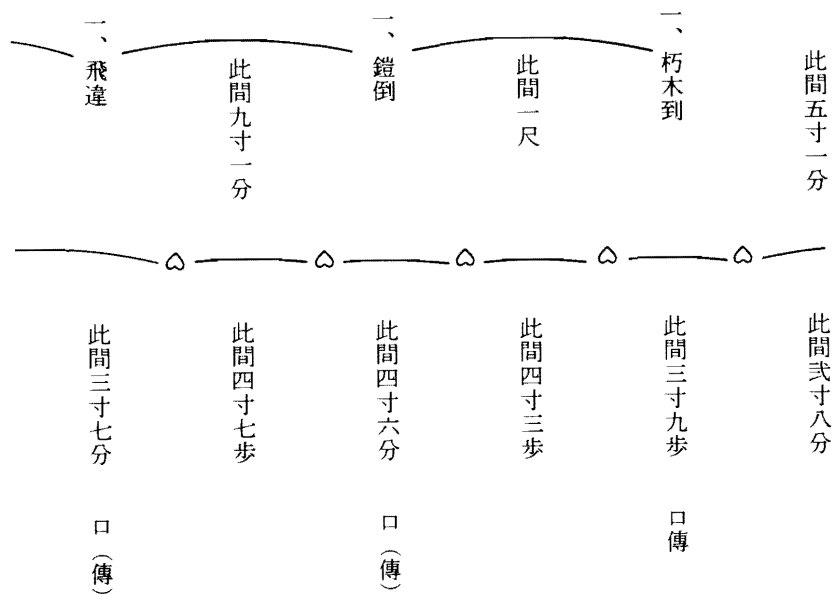
大間組合四つき二而吉

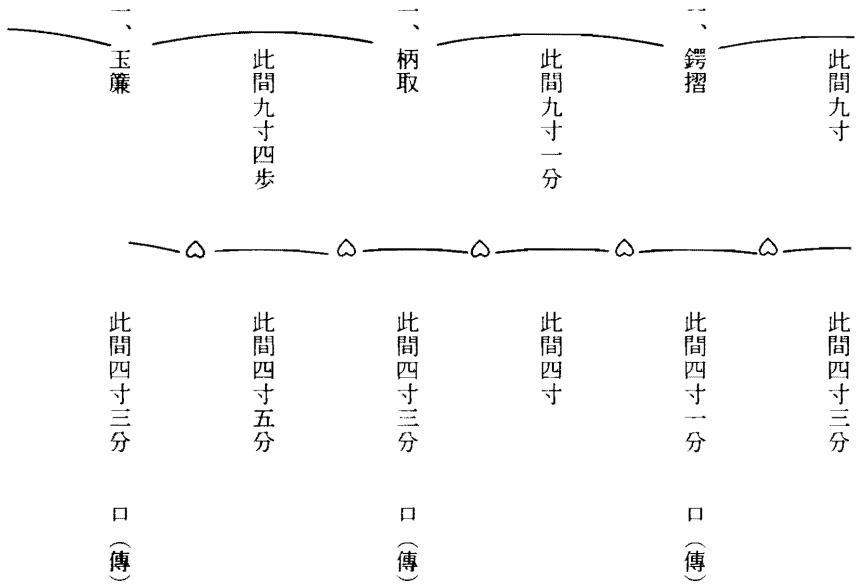
當田流太刀中極目錄 三

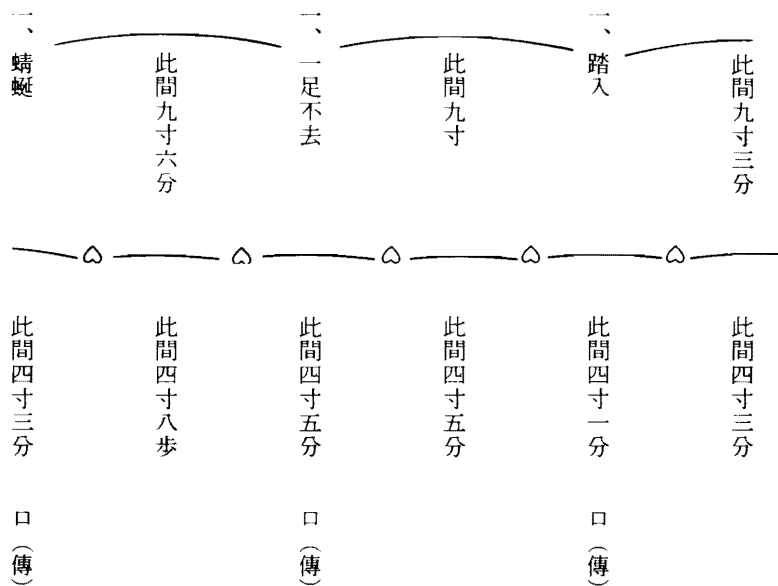
一、外説

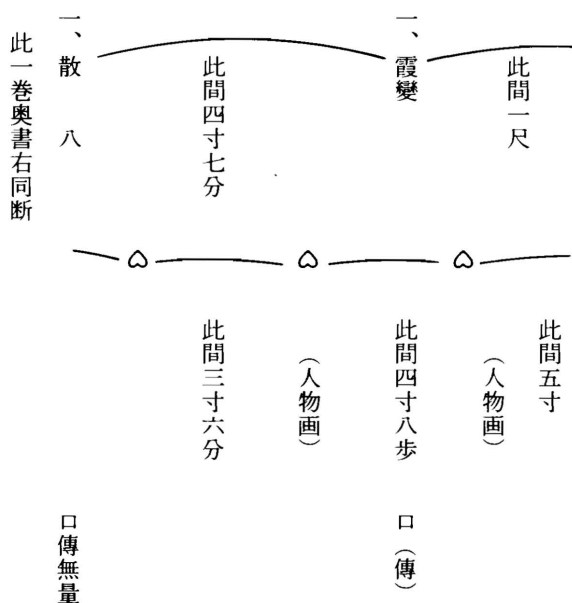
七

口傳重々







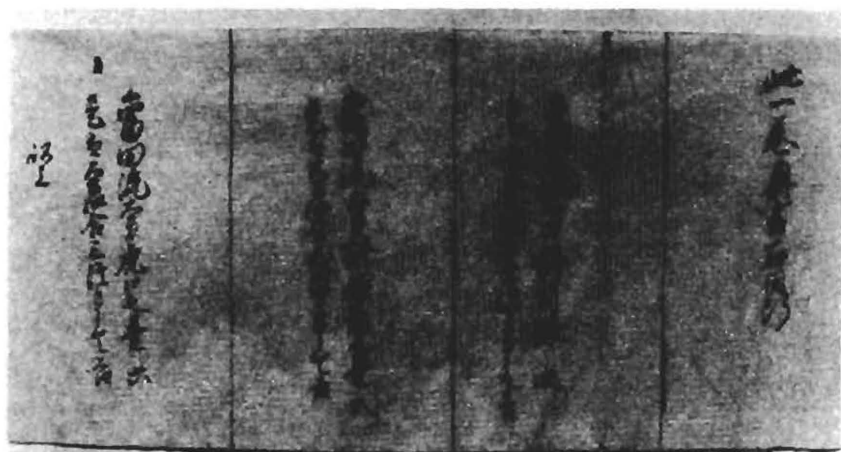


當田流太刀許目録 四 写真(4)

是は大間組合巻つき半にて吉

當田流太刀許極意之巻 五

是は大間組合式つき半にて吉



写真(4) 「當田流太刀許目録四」「同許極意之巻五」「同虎口之巻六」には人物画がないので、伝書全体の長さだけを示している。

當田流太刀虎口之卷 六

是は大間組合三つきにて吉

以上

解説

(1) 「門弟へうつさせ候時入用也」という添え書きの意味は、門弟に伝書を書かせる時には一定の様式をふむ必要があり、その様式の手本としてこの資料が「入用」であるということである。

すなわち、弟子に伝授する伝書は師匠が直接書いて与えるのが建て前であるが、それを弟子が自分で書いて師匠に見てもらい、それに師匠が署名し印判を押して授与する場合もある。このようなときに、その書き方の様式を示す手本が必要だったのである。

寺山家の當田流資料の中でただ一点の珍しい資料である。

(2) 「當田流太刀表目錄 一」の終りに「寶永二乙酉曆（一七〇五）八月廿九日」の年号の記載がある。浅利伊兵衛が師匠の當田半兵衛吉正より「當田流太刀嫡傳之卷」及び「當田流太刀印可之卷」を伝授されたのが延宝八年（一六八〇）九月十五日であり、文字通り唯一の道統者となった。宝永二年（一七〇五）はそれ以後の期日である。弘前藩の當田流を背負っていた浅利伊兵衛は、おそらく将来の「卷物」の記述形式を考慮して書いたものと思われる。

11、當田流太刀目錄 一

卷子本

本資料には「當田流太刀表目錄、同裏目錄、同中極目錄、同許極意目錄」が収められている。
人物画はなく、すべて文字のみによる傳書である。

〔當田流太刀裏目錄 写真(5)〕

一、諸上

一、摺込

一、合車

一、合陰

一、糊付

此一巻別而為秘事之間聊能
相他見有間數者也

〔當田流太刀裏目錄〕

一、合位 口傳

一、波返 口傳

一、芝返 口傳

一、波割 口傳

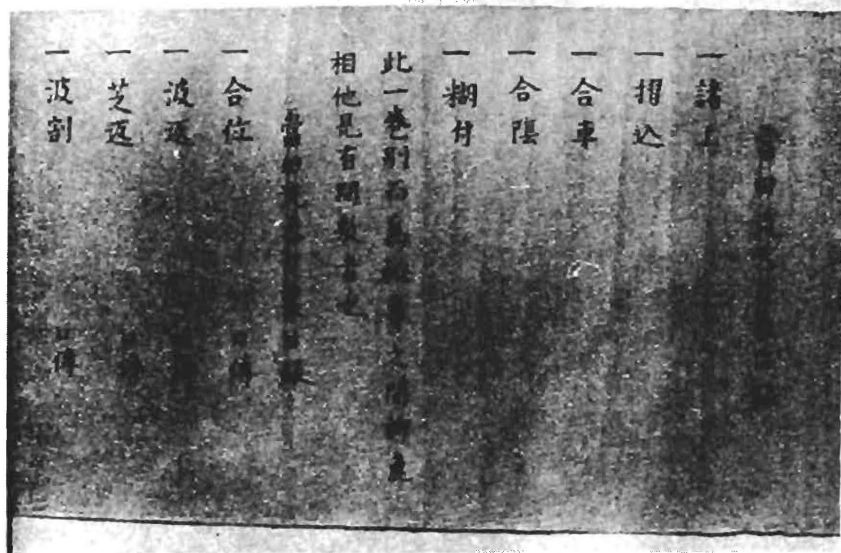
一、有二劔 口傳

此一巻別而為秘事之間聊鹿
相他見有間敷者也

當田流太刀中極目錄

- | | | |
|--------|---|------|
| 一、外設 | 七 | 口傳重々 |
| 一、朽木倒 | | 口傳 |
| 一、鎧倒 | | 口傳 |
| 一、飛違 | | 口傳 |
| 一、鏑摺 | | 口傳 |
| 一、柄取 | | 口傳 |
| 一、玉簾 | | 口傳 |
| 一、踏入 | | 口傳 |
| 一、一足不去 | | 口傳 |
| 一、蜻蜒 | | 口傳 |
| 一、霞變 | | 口傳 |
| 一、散 | 八 | 口傳無量 |

右一卷別而為秘事之間聊鹿
相他見有間敷者也



写真(5) 「當田流太刀表目錄」の書き出しの部分。形を示す人物画はない。

雷田流本加許極意目錄

一、強盜切 口傳

一、車之拔身 左右 口傳

一、陰之拔身 左右 口傳

一、合柄取 二 口傳

一、清眼詰 二 口傳

一、無二劔 二 口傳

一、巖石落 取組 口傳

廿八結 三

一、横聞 口傳

一、從入 口傳

一、無相見 口傳

鋪留 二

一、捨身劔 口傳

一、雷必劔 口傳

管鐘 五

一、諸管 口傳

一、丸橋 口傳

一、車劔

口傳

一、劔當

口傳

一、遊乱

口傳

此一巻別而雖爲秘事不淺

御執心之間令相傳畢聊能

相他見有間敷者也

鵜戸大権現

當田廿五代

當田清源

當田内記

當田權右衛門尉

當田權太夫吉政

當田半兵衛尉吉政

浅利伊兵衛尉均祿

一戸主之助末明

浅利万之助

神
茂左衛門殿

12、當田流太刀目錄 二

本資料には「當田流太刀許極意之卷、虎口之卷」が収められている。
人物画はない。

當田流太刀許極意之卷 写真(6)

夫兵法之要者心行一致爲
要者也近世之劍術以木刀
簞之輕爲速疾之作欲已無
難勝人矣或用種々之幻術
惑人有欲得勝者是非劍術
之實也人如是見奇變多爲
好之是愚至也此等之類常
雖爲奇於到實者不可及者
也是皆其術高而無實故也
予家傳者爲本實而無邪術
也逢敵則無滯如流水之近
倚而將替首股又骨肉本焉
云爾



写真(6) 「當田流太刀許極意之卷」の書き出しの部分。原本には「返り点」等があったが、これは「白文」となっている。

神妙劍

へ是者萬行祈禱秘術也 重々口傳

一、第一当田流目付之秘事といつは紅葉

の目付なり 一つの目付とも日月の目付と

もいふなり 抑紅葉の目付といふハ敵の両眼

を見る一つの目付なり 敵の両眼を能見込(よこ)(時は敵)

いかやうに變し打懸るといふも 上下左右

其變よく明に見ゆるなり 能明に見ゆる

時ハよく變に應ずるなり 敵の變する

いろを能見つくる 其色に付を紅葉の

目付といふなり 両眼を日月といふ事

あるによつて日月の目付ともいふなり

一、第二当田流之教入て極楽引地(こく)と 写真(7)

いゝ首に股をかへ 又骨に肉を替るの教

なり しかれハ 敵にむかつて少も退事なく

只身命をなけうつて深くふみ込 敵の

太刀の鏑もと 或ハこふしにてうたるゝ覺

悟專一なり 打(う)つ(つ)ほをはつれ鏑本にて打



写真(7) 「當田流太刀許極意之巻」で兵法家の心得を述べた部分。

るゝ時ハ肉も切るゝ事なし しかる時ハ利有
 如此のさかいは諸流とも口にハいふといへ
 とも 心實(眞)に知る人まれなり 能々心得
 執行あるへし

一、第三劔術必竟ハ一心くろうして利(開)

を得る事なし 縦如何なる者なりとも目に(たと)

見 かたち有ものにおいてハミちんに打碎(散)

或ハかミひしき捨へきとおもふ一心たしか

なる時ハ 是をのつから心をさまり おとろ(目)

く事なく心明らかなになる故 利をうる事也(たと)

縦兵法上手たりといふとも おくるゝ心有(道)

てハ利得る事なし 能々工夫肝要也

一、陰位之事 口傳

一、陽位之事 口傳

一、二刀拔合之事 口傳

一、鐵楯之事 口傳

一、捨留之事 口傳

一、實手白劔取之事

口傳

一、勝味位之事

口傳

一、外物之事

口傳

一、組討之事

口傳

一、無量口傳之事

口傳

（右條々之不知位 而向勝負事偏似

振盲目之杖右之位於鍛鍊者勝負明也

此秘術者縱雖積千金万寶兵法無執心者

不可深傳可秘者也

抑當田流兵法別 而雖為秘術數年被遂

稽古御執心不淺之間相傳之卷物令

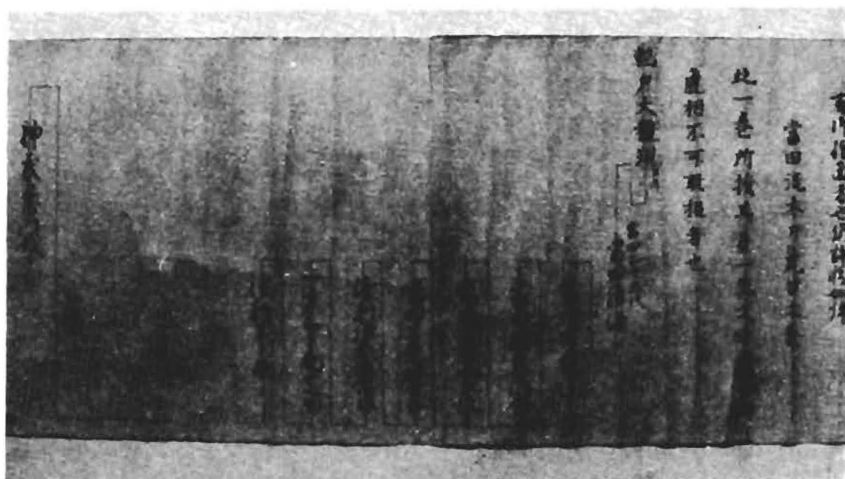
授与早 自今以後望之仁於有之者

可有御指南者也 仍許狀如件

當田流太刀虎口之卷 写真(8)

此一巻所授其身一生之守護也 聊

鹿相不可取扱者也



写真(8) 「當田流太刀虎口之卷」と「奥書き」の部分。「虎口之卷」は、原本とは全く異なっている。

鵜戸大権現ヨリ

當田二十五代

當田清源

當田内記

當田権右衛門尉

當田権太夫吉政

當田半兵衛尉吉正

浅利伊兵衛尉均祿

一戸主之助宗明

浅利万之助

神 茂生衛門殿

解説

- (1) 「目録一」には「表目録」「裏目録」「中極目録」「許極意目録」の伝書四本分が一本に収められている。おそらくここまでがひとつの段階、すなわち「目録」の水準を意味していると思われる。
- (2) 「目録二」には「許極意之巻」「虎口之巻」の伝書二本が収められている。おそらく「許」の段階を意味していると思われる。
- (3) 「目録一・二」とも原本には記載されていた「形」を示す人物画はない。また「虎口之巻」は極端に簡略化さ

れ、この文章だけでは意味が通らない。

(4) 浅利万之助（均夷）より神茂左衛門あてであるが、万之助の印判はなく、また年号の記載もない。

(5) 「當田流太刀許極意之巻」の白文の部分の読み方については、前回に示したので今回は省略することにした。

13、當田流太刀表目錄

卷子本

本資料は初めの部分が欠損している。
人物画による傳書である。

一、諸上 写真(9)

一、摺込

一、合車

一、合陰

一、糊付

此一巻別而爲秘事之間

聊麤相他見有間敷者也



写真(9) 當田流太刀表目錄」の始めの部分「諸上」。この前の部分は欠損している。

鵜戸大権現

當田二十五代

當田清源 写真(10)

當田内記

當田権右衛門尉

當田権太夫吉政

當田半兵衛尉吉正

浅利伊兵衛尉均禄

成田兵右衛門尉総恒

戸田茂兵衛尉定明

戸田行左衛門尉定武

戸田行左衛門尉

天保九^(一八三八)戊戌年 定最 朱印花押

二月吉日

戸田八十八尉殿



写真(10) 「當田流太刀表目録」の「奥書き」の部分。「戸田茂兵衛尉定明」以後は、用紙を継ぎ足している。上部に継ぎ足しの「印」が押されているが、筆跡は異なっている。

14、當田流太刀裏目録

卷子本

本資料も表紙裏が欠け外題はないが、内題から表記の卷子本である。
人物画による伝書である。

一、合位

口傳 写真(1)

一、波返

口傳

一、芝返

口傳

一、波割

口傳

一、有二劔

口傳

此一巻別而爲秘事之間

聊僂相他見有間敷者也

鶴戸大権現

當田二十五代

當田清源

當田内記

當田権右衛門尉

當田権太夫吉政

當田半兵衛尉吉正



写真(1) 「當田流太刀裏目録」の最初の「合位」の部分。右上部の「當田流」のところに「總恒」（成田兵右衛門）の朱印が押されている。

浅利伊兵衛尉均祿

成田兵右衛門尉総恒

戸田茂兵衛尉定明

戸田行左衛門尉定武

戸田行左衛門尉

(二八三)
天保九_戌年 定最 朱印花押

二月吉日

戸田八十八尉殿

15、當田流太刀中極目録

卷子本

本資料も表紙裏が欠け外題はないが、内題から表記の卷子本である。
人物画による伝書である。

一、外証 七

口傳重々 写真⑫

一、朽木倒

口傳

一、鎧倒

口傳

一、飛違

口傳

一、鰐摺

口傳



写真⑫ 「當田流太刀中極目録」の「朽木倒」の部分。右上部の「當田流」のところに「總恒」の朱印が押されている。

一、柄取

口傳

一、玉簾

口傳

一、踏入

口傳

一、一足不去

口傳

一、蜻蜒

口傳

一、霞變

口傳

一、散し
(ちら)

口傳無量

此一巻別而為秘事之間

聊鹿相他見有間敷者也

鵜戸大権現

當田二十五代

當田清源

當田内記

當田権右衛門尉

當田権太夫吉政

當田半兵衛尉吉正

浅利伊兵衛尉均祿

成田兵右衛門尉総恒

解説

戸田茂兵衛尉定明

戸田行左衛門尉定武

戸田行左衛門尉

(一八三八)
 天保九戊戌年 定最 朱印花押

二月吉日

戸田八十八尉殿

- (1) 津輕弘前藩の當田流太刀の道統は、當田半兵衛吉正より浅利伊兵衛均禄へと続くが、浅利伊兵衛の弟子には傑出した人物が多かった。既出の一戸三之助宗明は中でも拔群であったが、その他『要務秘鑑』（弘前市立図書館蔵）の「師役之部」や『奥富士物語』の「巻四下」（当『文化紀要』第二四号一二四頁参照）によれば、高弟として成田兵右衛門総恒、山形半兵衛茂倫、笠井伝右衛門定勇、渡辺次太夫利吉、小野竹右衛門、佐藤又兵衛行尚、小笠原万蔵、神勘太郎、長内作左衛門等を挙げることができる。三之助宗明は唯一人印可を受けた人物であるが、その他右の門弟は「免許」を与えられ弟子をとることを許された人物である。戸田行左衛門もその中のひとりで、成田兵右衛門総恒系の人物である。
- (2) 本資料に紹介した伝書三巻（表目録、裏目録、中極目録）は、いずれも人物画をもって「形」を表わしている。
- (3) 何れの伝書も、奥書「戸田茂兵衛尉定明」以後の用紙は継ぎ足しである。継ぎ足しの箇所には「印判」があるが筆跡は違っている。

16、「當田流劔術私手鑑」写真(13)

當田流太刀表目錄

一、諸上写真(14)

一、摺込

一、合車

一、合陰

一、糊付

此一巻別而爲秘事之間聊麁相

他見有間敷者也

鶴戸大権現ヨリ

當田二十五代

當田清源

當田内記

當田權右衛門尉

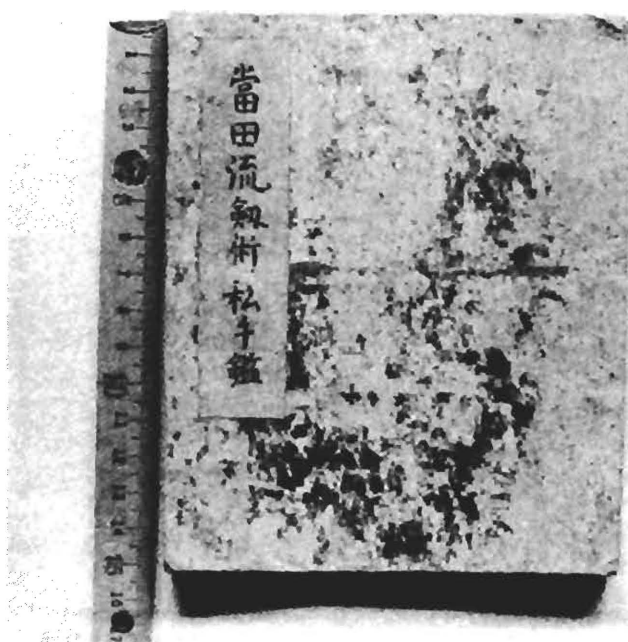
當田權太夫吉政

當田半兵衛吉正

浅利伊兵衛均祿

一戸三之助宗明

折本



写真(13) 「當田流劔術手鑑」の大きさを示す。縦約15cm、横約12cm。

浅利万之助均費

浅利清蔵 均諸

浅利万之助

(一七七八)
安永七^戊 戊曆十月

均豊 花押 写真(15)

清源ヨリ 十一代

永田軍七殿

参

當田流太刀裏目録

一、合位 口傳

一、波返 口傳

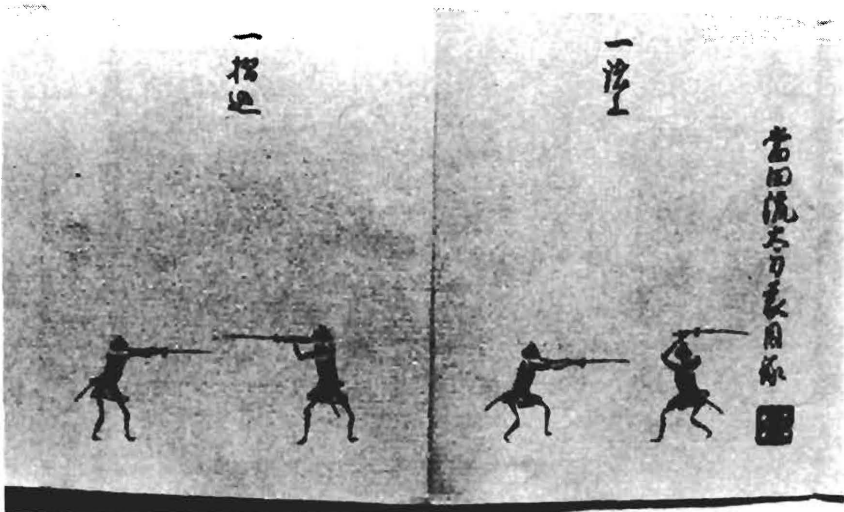
一、芝返 口傳

一、波割 口傳

一、有二劔 口傳

跋書同断

當田流太刀中極目録

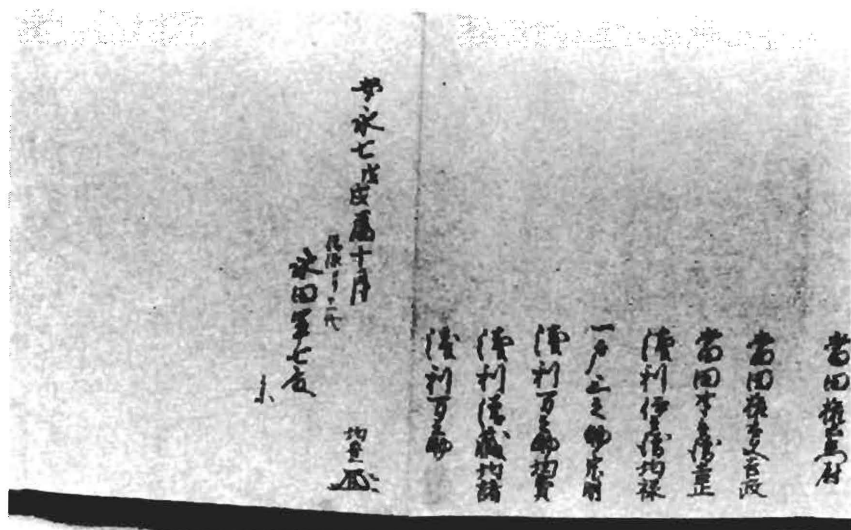


写真(14) 「當田流太刀表目録」の「諸上」「摺込」の形を示す人物画。

一、外談 七	口傳重々
一、朽木倒	口傳
一、鎧倒	口傳
一、飛違	口傳
一、鏑倒	口傳
一、柄取	口傳
一、玉簾	口傳
一、踏入	口傳
一、一足不去	口傳
一、蜻蜒	口傳
一、霞變	口傳
一、散し 七	口傳無量
跋書同断	

當田流太刀許極意目錄

一、強盜切 左右	口傳
一、車之拔身 左右	口傳
一、陰之拔身 左右	口傳



写真(15) 「當田流太刀表目録」の「奥書き」の部分。「花押」はあるが「朱印」はない。「奥書き」の記載は、この部分のみである。

一、合柄取 二

口傳

一、清眼詰 二

口傳

一、無二劔 二

口傳

一、巖石落 取組

口傳

二人詰

一、横聞

口傳

一、從入

口傳

一、無相見

口傳

鍬留 二

一、捨身劔

口傳

一、雷必劔

口傳

管鑪 五

一、諸管

口傳

一、丸橋

口傳

一、車劔

口傳

一、劔當

口傳

一、遊乱

口傳

己上

此一巻別而雖爲秘事不淺御執心之

間令相傳早聊鹿相他見有間敷者

也

師之名 同断

當田流太刀許極意之巻 写真⑩

夫兵^レ法^一之要、者心^一行^一致爲^レ要^一者也、近^一世^一之劔術以^テ木^一刀^一竦^一之輕^一爲^レ速^一疾^一之作^一欲^ス已^レ無^レ難勝^一人^ニ矣或^ハ用^一種^一々^一之幻^一術^一惑^一人^一有^レ欲^レ得^一勝^一者、是^レ非^一劔術^一之實^一(世)人如^キ是^一見^一奇^一變^一多^一爲^レ好^一之^一是^レ愚^一之至^一也此^レ等^一之類^一常^一雖^一爲^一奇^一於^レ到^一實^一者不^レ可^一及^一者^一也、是^レ皆^一其^一術高^一而無^一實故^一也予^一家傳^一者爲^一本^一實^一而無^一邪^一術^一也逢^一敵則無^一滯^一如^一流水^一近^一倚^一而將^一替^一首^一股骨^一肉^一本^一焉云^一爾

己上

此一巻別而雖爲秘事不淺御執心之
間令相傳早聊鹿相他見有間敷者

師之名

當田流太刀許極意之巻

夫兵^レ法^一之要、者心^一行^一致爲^レ要^一者也、近^一世^一之劔術以^テ木^一刀^一竦^一之輕^一爲^レ速^一疾^一之作^一欲^ス已^レ無^レ難勝^一人^ニ矣或^ハ用^一種^一々^一之幻^一術^一惑^一人^一有^レ欲^レ得^一勝^一者、是^レ非^一劔術^一之實^一(世)人如^キ是^一見^一奇^一變^一多^一爲^レ好^一之^一是^レ愚^一之至^一也此^レ等^一之類^一常^一雖^一爲^一奇^一於^レ到^一實^一者不^レ可^一及^一者^一也、是^レ皆^一其^一術高^一而無^一實故^一也予^一家傳^一者爲^一本^一實^一而無^一邪^一術^一也逢^一敵則無^一滯^一如^一流水^一近^一倚^一而將^一替^一首^一股骨^一肉^一本^一焉云^一爾

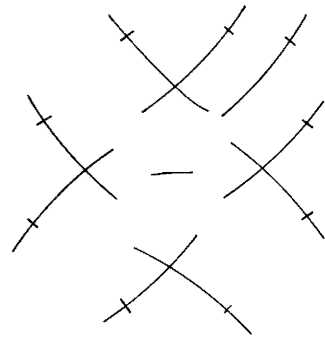
此一巻別而雖爲秘事不淺御執心之

間令相傳早聊鹿相他見有間敷者

師之名

當田流太刀許極意之巻

神妙劍



是者萬行祈禱秘術也

重々口傳

一、第一當田流目付の秘事といへは紅葉の目付なり 一つの目付とも日月の目付ともいふなり (そもそも) 抑紅葉乃目付といふは 敵の両眼を見る一ツの目付なり 敵の両眼を能見込時は (たとい) 縦敵いかやうに変しうち懸るといふ共上下左右 其変よく明らかに見ゆるなり 能明らかに見ゆるときは能変に應するなり 敵の変する色をよく見付 其いろに付を紅葉の目付といふなり 両眼を日月といふ事有るによつて日月の目付共いふなり

二、第二當田流の教入て極楽引地獄 首に股をかへ 骨に肉を替るのおしへなり 然は敵にむかつて少も退く事なく 只其身をなけうつて深く踏込ミ 敵の太刀の鏑もと或はこふしにて打るゝ覚悟專一なり 打つほをはつれ鏑もとにうたるゝ時は肉もきるゝ事なし 然る時は利あり 如斯境は諸流共に口にはいふといへ共 信實にしる人希なり (稀) 能々心得て修行有るへし

一、第三劍術必竟は一心くろうして利を得る事なし 縦ひいかなるものなり共目に見へ形有るものにおひてはみち(眞意)んに打碎き 或は(或)かミひしき捨へきとおもふ一心たしかなる時は おのつから心おさまり驚事なく心明らかなる故利を得る事なり 縦兵法上手たりとも おくるゝ心ありては利を得る事なし 能々工夫肝要なり

一、陰位之事

口傳

一、陽位之事

口傳

一、二刀拔相之支

口傳

一、鐵楯之支

口傳

一、捨留位之事

口傳

一、実手白刃取之支

口傳

一、勝味位之事

口傳

一、外物之支

口傳

一、組討之支

口傳

一、無量口傳之事

口傳

右條々之不知位而向勝負事偏似振盲目之杖 右之位於鍛鍊は勝負明也 此秘

術は縦雖積千金万寶兵法無執心者深不

可傳可秘者也

抑當田流兵法別 而雖爲秘術數年被遂 写真(17)
稽古御執心不淺之間相傳之卷物令授与

早 自今以後望之仁於有之者可御指
南者也 仍而許狀如件

師之名 同断

永田氏藏書 (印)

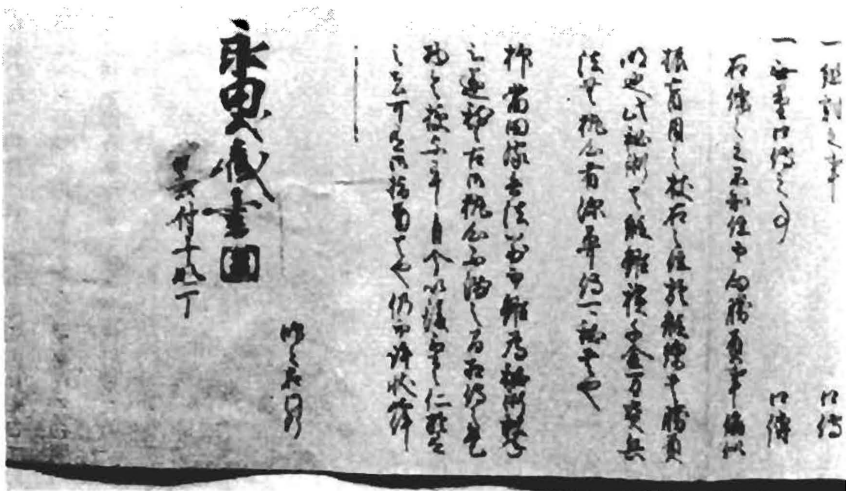
墨付十八丁

解説

(1) この「手鑑」は「折本」の体裁で「卷子本」ではない。
(てかがみ) (おりほん)

もともと「手鑑」は、代表的な古人の筆跡や写しを集めて帖に貼ったものとか、書道の手本などを意味していた。しかしここでは、當田流太刀に関する伝来の技法目録や心得などを小形の一冊にまとめ、これを懐中にして随時ひもどいて見ることができるとしたものと思われる。

また「折本」は、「卷子本」のように横に長く貼り継いだ紙を綴らずに折りたたんだ本で、もとは経文



写真(17) 「當田流太刀許極意之卷」の最後の部分。「永田氏藏書・墨付十八丁」

などに用いたといわれる。本資料の「折本」は、内容は當田流太刀に関する伝書であるが、小形であるので容易に懷中にすることができて、修行者には便利である。「卷子本」では最後の方を見るのに全部開かなければならないが、「折本」にはこのような不便がない。

(2) 内容は「表目録」「裏目録」「中極目録」「許極意目録」「許極意之巻」の伝書五巻分が収められている。「虎口之巻」は載っていない。また、「形」を示す人物画はない。

(3) 授与の立場にある浅利万之助均豊は、『要務秘鑑』『師役之部』によると、宝暦十二年（一七六二）父浅利清蔵より指南の資格を許されている。浅利家直系の人物である。

17、當田流太刀解説書 冊子本

本資料は冊子本の形式ではあるが表紙はなく、仮綴である。表題も仮の名称である。なお本資料は反古の料紙を使用している。

當田流は神流ニシテ術アヤシキ業ヲ不用鵜戸大権現ヨリノ庶流ナリ疑惑ヲ生シ物ニノゾンテ命ヲ惜^{おしこ}アヤフム心有テハ此流ノ本意ニ叶イカタシ写真⁽¹⁸⁾



写真(18) 當田流解説之書の書き出しの部分。

ウカヤフキ合ヒスノ尊ヲ日本武ノ尊ト申ス(1) 鵜戸大権現
ノ宮ト申是ナリ

當田ノ二字ハ正ニ(くに)口ノ士ニアトウルト云事也(書) アタルヲ

与ルト唱フ事古ヨリ申傳 神妙劔神宣之卷ハ不書 只業一
通書顯ス 謹而他見他言不可有也

當

諸上口傳 摺込同 合車同 合陰同 糊付同

合位同 波返同 芝返同 波割同 有二劔同

外設七口傳重々 朽木倒口傳 鎧倒口傳

右二本取組 但シ鎧倒替一本

飛違同 鐐摺同 柄取同 玉簾同 踏入同 一足不去同

蜻蜒同 霞変同 跡二本仕合太刀 散シ八口傳無量

此一巻

敷者也

極意目録

強盜切 左右口傳

敵上段此方柄両手ニテ持 双方下ニナシ (膝)ヒサヨリ下ケ 切先高ニ持掛マハサ形リ真向ヲ敵ニアダエカケ入
リ変ニ応シ左右ヘ拔ケ勝事也 切先ノ當所勝アリ

車之拔身 左右同

敵上段此方有二劔 打坪ニテ右車ニ取 変ニ応シ左右ヘ拔勝事ナリ 敵ノ両小手ニ勝アリ 口傳

陰之拔身 左右同

敵上段此方陰ナリ 打坪ニテ (膝)ヒサヲワリ切下ケ 変ニ応シテ左右ヘ拔ケ勝事ナリ 敵ノ小手ニ勝アリ

台柄取 二同

互ニ陰ニ持掛 敵ヨリ打掛ル時鑢合セニナルヤウニ請留 先越左手ニテ敵ノ右手ヲトル 敵亦我カ手ヲトル
時引切ニ下ヘ切リハナシ 敵ノ右脇ヘ廻リ右コフシヘ (拳)ヒシト切付勝事也

一本ハタカイニ陰ニ持掛ケ鑢合セニ打合スル時 先ノ越左手ニテ敵ノ右手ヲ取 柄頭ヲ以テ敵ノ柄ヲ上ヘ張
上ケ引柄ニテ敵ノ左ノ手ノ首ヘ引カケ 引切りニ切テハナシ 敵ノ右ヘヒシト付 劔先敵ノノトフエヘ押シ
アデテ勝事也

清眼詰 二同

敵ハ清眼此方有二劔也 清眼我カ鼻ヘ届クホト (程)マテニシテ外設ノ如クノリ詰勝

一本ハ同清眼ナリ 此方有二劔ニシテノリ勝ヘキ色ヲ見スル時 敵少シ引キナス時ニ右車ニトリ引 敵付込
時ニ敵ノ左ヘ廻リナカラ両コフシ曲尺ニシテ横ハリニ込勝事也

無二劔 二同

敵上段此方有二劔 打掛ル時ニ敵ノ右脇へ両小手ヲ払上勝事也

一本ハ打坪ニ至リ声ヲ発シ獅子ノ怒ヲナシ 中極ノ玉簾ノ冠ニナシ 疑ナク敵ノ真向へ打付テ勝事也 コレ

ハ身ノハツレナリ 冠時腰居(腰)ヘツルナリ

巖石落 二 取組 口傳

互ニ陰也 敵ヨリ打掛ル時鑊合セニ請留メ 太刀ヲ捨テ敵ノ両手ニ取付 アラニカエリサマニ両足ニテ敵ノ

キン玉ヲケ上ケ 我頭ヲ越シ前へ落シ勝ナリ

一本ハ上タン(段)此方有二劔ナリ 打坪ニテ声ヲ発シ左リヒザ折り 太刀ヲ我カ股カラミ打ニ下へ打付クル時ニ

敵打掛ルト太刀捨両手へ取付 以前ノ如ク両足ニテ當テ前へ落シ勝事也 敵ノコフシ(事)ノ下へ入事大変ナリ

二人詰 三

横聞 口傳

敵兩人ナリ 左右ニ立テ上タン(段)ニ扣(控)ル 此方有二劔ナリ 左ノ敵目掛ケ仕掛ル時ニ右ノ敵ヨリ打掛ル時外諷

ノ二ツメノ技ニテ敵ノ右ノ方へ拔勝事也 身ノ替リ左右ノ目賦(くばり)リヤウ肝要ナリ

從入 同

敵兩人左右ニ立テ上タンニ扣ル 此方有二劔 右ノ敵ヲ目當ニ左ノ敵ヲ尻目ニカケテ兩人ノ中へ進入 左リ

ノ敵打カケル右足ト一拍子ニ敵ノ左リへ拔勝事也 右ノ敵打カケル時 左足ト一拍子ニ敵ノ右脇へ拔ケ勝事

也 左右ノ働肝要也 敵ノコフシノ下へ入事一ナリ

無相見 同

敵兩人下清眼ナリ 左右ニ立テ扣ル 此方有二劔ナリ 兩人ノ真中へ進入左ノ方へヨリ通ル 左リ敵打カケル敵ノ左へ抜ケ勝事ナリ 右ノ敵打掛ル時右足ト一拍子ニ敵ノ左へ突勝事也 真中打ワリ通ルト見セ左右ノ敵ヲ我カ目付次第ニテ自由ニツカイ打掛サスル事也 其色敵ニ察セラレヌヤウニスベシ

鎗留 二

捨身劔 口傳

鎗中^(段)タン此方陰ニ持カムル 一足踏出シ太刀打へ前車ニ応シ合セ鎗顔へマワスニモカムワラズ左足フミ込冠リ入勝事也 四寸ノ替両ヒシ勝ナリ

雷必劔 口傳

鎗中段此方諸手ノ上段 切先上リニ頭上ニテ雷火ノ如クヒラメカシ 鎗ヲフミ落スベキ勢ニテ飛掛リ 胴中ヲ突時ニ左足敵ノ右方エ抜開キナカラ右ノ方へハリ落シ勝事ナリ

管鎗 五

諸管 口傳

敵下ダン此方上ダンナリ 顔突時ニ左リ足踏込ナカラ冠管口へ摺込 左リノ方へ踏込開キ勝事也

丸橋 口傳

敵ヒラ也此方上段ナリ 顔ヲ突時左足フミ込ナカラ冠管口へ摺付ル時 敵亦引ナカラ脇坪ヲ突時下ニテ中段ニ合セ後へ越シ左右踏込ナカラ左リノ方エ卷摺ニ管へ摺付ケ勝事也 足ノ踏ヤウ三角ノ体口傳アリ

車劔 同

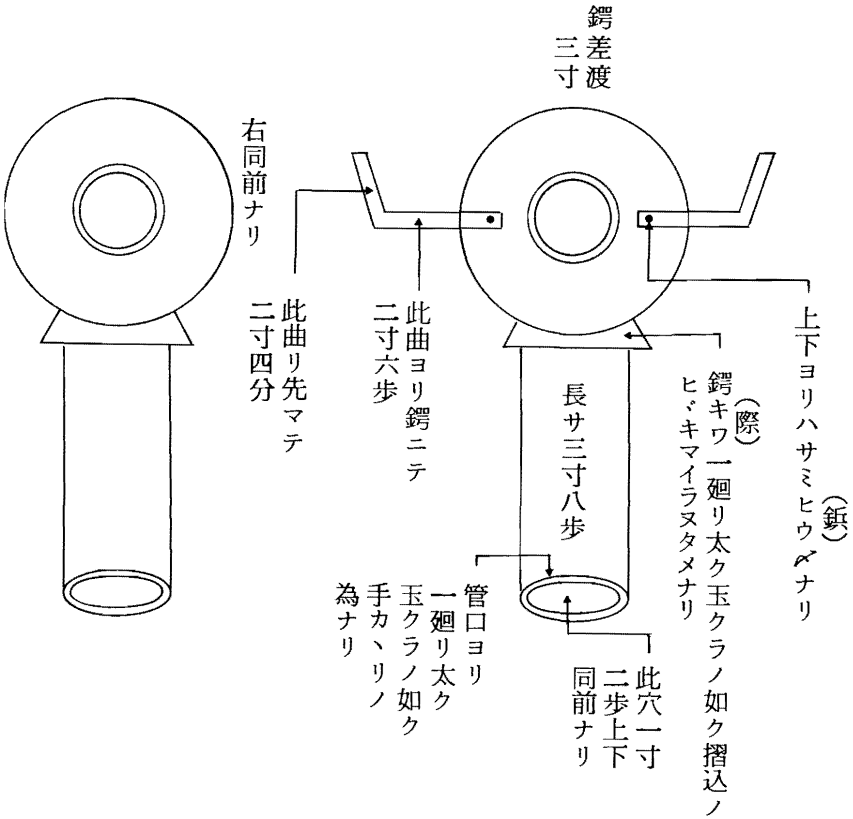
敵中ダン此方上ダンナリ 脇坪ヲ突時中ダンニ応シ上ヨリハリ落ス時敵顔ヲ突時ニ左足逃込ナカラ冠リ管口へ摺付ル 亦引ナカラ脇坪ヲ突時ニ中段ニ合セ 後へコシ踏込ナカラ冠リ管口へカラミ摺ニスリ付勝事ナリ

劔當 同

互ニ上ダンニハツシ脇坪ヲ突 中段ニ応シ敵亦顔ヲ突時左リ足踏込ナカラ冠リ管口へ摺付ル 亦脇坪ヲ突時中段ニ合セ ウシロへ越シカラミ摺ニ管口へ摺付勝事ナリ

遊乱 同

敵飛乱ナリ此方上段ナリ ヨリ所ニテ敵顔ヲ突時左リ足踏込ナカラ冠管口へ摺付ル 亦脇坪ヲ突時中段ニカラミ摺ニ管口へ摺付ケ左リノ外ヨリ脇坪ヲ突時ニ左右ノ足踏替 石突ニテ冠リ左足フミ込ナカラ右ノ方へ摺勝事ナリ 石突ニテ勝事モアリ 亦摺捨タル時左右ノ足引替勝事ナリ 惣而管鑓ハ体三角ナリ 左リ足フミ込時ハ右ノ方へ筋違テ踏出ス 穂先三尺ヨリ不出短ク持テ一体ヲナケウチ敵ト鼻合セニ仕掛ル物也 シテ下リニ冠ノ曲尺ハ我管ノ鏢ハ我カ目通ニ冠 敵ノ左右摺付ケハ右手ノ働ナリ 管鑓ハ只摺付ル事肝要ノ勝ナリ 打ハリハ管故不宣ナリ



二本共ニ柄長サ九尺也 好ニモヨルベシ

此一巻別而————者也

————許極意之巻

夫兵法之要者————云爾

神妙劔

是者萬行祈禱秘術也 重々口傳

神妙劔トハ虎口ノ巻ノ事也 神妙劔業斗傳受之

第一當田流————目付トモ云也

第二當田流ノ教————修行アルヘシ

第三劔術————工夫肝要也

陰位之支 口傳

太刀ヲ持立合フ所ハ陰ニシテ不動明王ノ形也 物ニ不動利劔ヲ以テ惡魔ヲ降伏シタモウ形也 外陰ニシテ内ニ陽ヲ含ム事肝要也

陽位之事 同

獅子忿嗔ノ怒ヲナシ 大山モ崩シ 大地ヲモ引サクノ勢ヒ発スルハ陽也 内陰分ヲ含ム事口傳 敵ニ応テハ陽ヲ表トシ 陰ヲ内ニ含ム事内外陰陽相含ンテ危事ナシ

二刀拔相之支 同

右劔左劔ノ二刀也 左リヲ楯トシ右ハ劔也 拔ハ発スルニシテ陽也 陽ハ理ナリ形ナキ所也 相ハ形ニシテ頭ルゝ所ナリ 陰ナリ 支理合体ノ場也 重々口傳有事ナリ

鐵楯之支 同

是ハ大勢之敵ニ取巻レタル時 切破テ可通ノ術ナリ 惣マクリト云是也 人久ト振ル事口傳 仕方有人道捨車ト云秘支ノ両車之勝アリ 惣シテ太刀打ハ敵鼻両小手ヲ掛テ引切リニスル事秘支也 惣マクリハ長刀ニ有鎗ニ有 棒ニ有リ 口傳

捨留位之支 同

敵イカヤウニ構備ト云共 此方有二劔ナリ 捨ルハ我身ヲ敵ニ抛チ捨テ 少モ臆スル氣ナク鼻合せニ進ミ掛入テ先太刀ヲハ敵ニ与ヘ全ウ勝利ヲ得ル所ハ捨留ナリ 位ハ互ニ相對シテ拔郡勝^(群)レタル所ハ位ナリ 敵ノ氣ヲ吞掌握スル所ヲ云也

實手白刃取之支 同

我無刀ニシテ太刀ニ向勝負致支ナリ 一心タシカナラスシテ不可叶 亦劔ナキニ非ス 心劔有 右劔左劔ノ

両刀ヲ持 何ソ白刃ニ向事難カルヘキ 習第一ナリ
 勝味位之支 同

字義之如ク味ウテ初トナク前後左右皆敵ナレハ對スル敵ニカゝワラス 勝テ甲ノ緒ヲシメヨト云古語ノ如シ

先勝テ後ニ大ナル負ヲ取支油断ナリ

外物之支 同

縦ハ風呂屋数奇屋御前杯ニテ無刀ニテ逆意乱心者意趣打有之節 其座席ニ有合物ヲ以防ク事也 此心得當

番ニテ御前ニ出ル時ハ自然ノ支有ハ如此可致ト常ニ心ヲ付ケ可申事也 御ミニテツカヘハ一通ハ女中ニテモ

彌事也 必竟ハ御前堅固ノ爲ナリ 風呂屋数奇屋無刀ノ場所心得ナリ

組打之支 同

是ハ具ニ業ニ出ス故不記 氣賦リ大事

無量口傳之支 同

万事執行熟練ノ所ニハ不計モ受スシテ氣自然ト發達シ其変ニ応スル物也 以心傳心ニテ教ヘ習レヌ場ナリ
 執行ノ相合シタル所也

右條々 可秘者也

抑当田流 許状如件

鵜戸大権現ヨリ

當田

浅利

成田兵右衛門尉

總恒

堀口安兵衛尉

胤清

一、當田流太刀長サ大ハ二尺七寸（頭註に「八カ」とある）柄九寸 中ハ二尺三寸 柄ハ八寸ナリ 小ハ一尺八寸 柄六寸ナリ 當流ハ大小共ニ柄形リウコウト云

一、敵ヲ日表ニ不可立 日光リ眼ニ入テ不宜 第一天地ニ敵スルニ似リ （敵を） 風上ニ不可立 砂土眼ニ入テ不宜 高ミ坂上ニ敵不可請 横合ニウクベシ

一、追掛ケ者ハ重リ合テ不可進 左ニ見進カクベシ 返打ノ爲ナリ

声ヲ掛テ氣ヲクジカシベシ 足腰ニ早ク氣ヲ付ヘシ タヲサレサル爲ナリ

一、夜中山中細道橋ハ敵ヲ左ニ請通ベシ 此方ハ敵ノ右ニ付ベシ

一、敵三尺ノ長太刀ヲ以テ股太腹ヲ不寄ト左右ヨリ横ナキニスル時 此方一尺八寸ノ小太刀敵ノ頭上ニ當ル事 口傳

一、二刀ツカイノ支 是以テ少モ不恐事也 此方陰ニ持ベシ 違ヒタル所ニ一ツノ勝有 口傳重々

一、當田流ニコツハノ當ト云テ手ヲ以當ノ打所有 一ニマヒサシ 二ツ耳ハキ 三ツ居リ立トスル所 股ノ付ケキ(磨)

ハ木刀棒何レニテモ刃ノナキ物ニテ敵打時ハ耳目鼻ナリ 白刃合ハ両小手ヲハリ上カラミ引切吉シ

一、寢室ノ大夏(二)通二刀ニテ挟ム事 胸クラヲトリ ノトフエノ支 口傳有

一、七里引両掛一人掛仕形 重々口傳

一、居合拔ハ拔セテ勝負スベシ 和術ハ三尺ヨリ寄ヌ物ナリ 口傳

一、今日木刀(わ)笈ニテ仕合ノ時モ目カクシノ心得外物無ノ云合セ 口傳

目カクシハ何ニテモ取合セナリ 是ヲ先トシテ先ヲ取者ハ必立居其容ス知ル(様子)物也 對敵スル時ハ全ク油断ス

ヘカラズ 臆スルヨリ耳目不明ナリ

一、棒合ハ左リ手ヲ開キ敵ノ兩眼ヲフサキ トビ付ン勢ヒニテ右車ニ太刀ヲ持四寸形ニ仕カケル 棒ハ打ヨリ両小

手ヲ下ヨリハリ上ル事肝要ナリ

一、長刀ニ水車トテ防カダキ術有リ 右車ニ持テ下ヨリ敵ノ両ヒヂカムリヲ払上ル 左右同前ノ働ナリ 右車右足

踏出シ 左車ハ左足踏出ス 足ヲ開キ敵ト筋違テ払事ナリ 棒ノ総マクリ是ナリ

一、夜中アヤシキ物ヲ見時ハ地ヨリ三寸耳ヲハナシ見通スヘシ 心氣ヲ落付ン爲ナリ 亦曰大小何レニテモ鏑ニス

カシ有ヲ刃方下ニナシ 鉄砲構ニシテスカシヨリ可見 生有ルハ不居 無生ハスワル体有テ異形ナルハ人究マ

ル 心氣軋動ヨリ臆病ヨリ異形アラハル

一、甲冑ノ打所一ニヒサシニ透間ヲ通ス 引切り口
傳

一、有二劔ハ敵對シテ拔持タル所ヲ二ツト見 左右手ヲ
劔二ツ也 胸中ノ劔ト持タル劔ト二ツ也 敵ノ持
タル真劔ヲ有トモ不思切ルトモ不思 兵法者ノ劔ハ
胸ニ有リ 口傳重々

一、無二劔ハ有二劔アレハ無二劔有リ 勝ニ二ツナシ切
ルニ二ツナシ 是無二劔ナリ 縦ハ無ニテモ劔ナキ
ニ非ス 劔有 可負ニアラス 是ニテ天性妙

劔不可疑 不熟不練ニシテ不可及也

一、懸声之支 アルトキ 一時ハ一喝ハ金剛王宝劔ノ如ク 一時ノ

一喝ハ踞地金毛ノ獅子ノ如ク 一時ノ一喝ハ探竿徑
草ノ如ク 一時ノ一喝ハ一喝一喝ノ用ヲナサス

(一七七九)
安永八歳次 季春下澣 写真(19)

藤原豊貫 謹書

墨付拾四丁



写真(19) 當田流太刀解説之書の最後の部分。

注(1)

ウカヤフキ合ヒスノ尊。鵜戸大神宮の祭神。彦波瀲武鸕鷁草葺不合尊。
ヒコナギサタケウカヤフキアエズノ

(2)

忿嗔ふしん。忿は怒りうらむこと。嗔は怒る義であるが、「獅子奮迅」の意ではないかと思われる。

(3)

数奇屋すきや。茶の湯を行小座敷。風呂屋ふろや（浴場）もともに武器を持たずに入る場所である。

(4)

自然じぜん。若しもの意。

解説

(1) 當田流太刀に関する貴重な解説書（冊子本）である。ただし、反古の料紙を使用しているので裏の文字がにじみ、また、片仮名混りで読み辛い。

(2) 解説の対象となった技は、「許極意目録」の七本（ただし、一本の技にも左右、あるいは二様の懸け方もある）、

「二人詰」三本、「鑓留」二本、「管鑓」五本、それに「許極意之巻」の奥伝とも云うべき十本である。

また最後には、伝書には一度も記されなかった勝負時の重要な心得が十八ヶ条挙げられている。

(3) この資料には、氏名の記載が一ヶ所出現する。成田兵右衛門総恒と堀口安兵衛胤清である。このことは、成田兵右衛門の弟子には戸田茂兵衛の他に堀口安兵衛の系統のあったことを物語っている。

(4) この資料には、年号や記述の時期に関する記載はない。

(5) 「謹書」したという「藤原豊貫」については不詳。

18、「當田流太刀并居合極位巻」写真(20)

折本

林崎新夢想流居合極位秘術

唯授一人目録

向次第

押上 押拔 防身 除身 幕越 胸刀 頭上

右身次第

突入 抜詰 手取扱 柄抜 成足

左身次第

開拔 左足 鞭詰 肢去抜 向足

外物次第

取違 寄足 寄身 懸蜻蜒 逆手 胸刀 逆頭上

外物次第

頂上 切先廻 二方詰

高上極位之巻

抑此兵術者自己默然而無進莫退左右亦如斯唯是逢源到
劔刃上走水凌上於生死岸頭得大自在向六道四生空古人



写真② 「當田流太刀＝居合棒極位巻」(折本)の表紙。
縦約14cm・横約7.5cm

云世間 空空無佛性空空真按之右之兵術是也

千金莫傳可秘々々唯授一人

萬事拔

千金位

秘歌之大事

①千八品本草葉と聞しかと 写真②

との病いにとしらて詮なし

②早くなく遅くはあらしおもなくなく

軽き事をへあしきとそいふ

③居合と八人にきられす人きらす

た (うけとろ) 請留てたいらかに (平) かく

④本乃我に勝か居合の大事なり

人にさかふ (逆) 非方なりけり

萬事拔 千金位

秘歌之大事

千八品本草葉と聞しかと
との病いにとしらて詮なし
早くなく遅くはあらしおもなくなく
軽き事をへあしきとそいふ
居合と八人にきられす人きらす
た (うけとろ) 請留てたいらかに (平) かく
本乃我に勝か居合の大事なり
人にさかふ (逆) 非方なりけり

写真② 「秘歌の大事」の最初の部分。

⑤ 鏢はたゝ拳の楯ときくものを

ふとくもふとくなきハひかこと

⑥ つよみにて行あたるをハ下手と云

まりと柳を上手とそいふ

⑦ 居合とは押詰ひしとおす刀

かたなぬくれハやかてつかるゝ

⑧ 後よりたますに手こそなかりけり

夢の抜とや是をいふらん

⑨ 世は^(後)みにてかちを取へ^(抜)きななかたな

短き刀利ハうすぎなり

⑩ 世中に我より外のものなしと

おもふハ池の蛙なりけり

⑪ 下手こそ上手の上のかさりもの
かへすくもそしりはしすな

⑫ 抜へ切るぬかねハきれよ此かたな
たゝ切事に大事こそあれ

⑬ 浮草をかきわけ見れハ底の月
爰に有といかてしられん

⑭ 居合とハ心にかつか居合なり
人にさかふ非方なりけり

⑮ 人いかに腹を立つ(たて)いかるとも
心にかたなこふしはなすな

⑯ ひしとつく丁と留るハ居合なり
拔ぬに切るは我をかひする

①⑦二人にハ勝れさりけり忍刀て

劔に恐れて手ハ出さりけり

①⑧居合とはよ(弱み)はみ斗てかつものを

つよみ(強み)てかつは非かたなりけり

①⑨見よや見よ憂世を渡る濱渚

魚と水とのかゝり火のかけ

②⑩世ハひろし折に寄りてそ替らん

われしる斗よしと思ふな

②⑪白刃むかふ七つをたのミにて

左り右りをなにとふせ(防)かん

②⑫金胎の両部の二つ見へにけり

兵法あれハ居合(施)はしまる

②③ いたらぬにゆるし好ミをする人ハ
居合の恥を我とかくなり

②④ 寒夜にて霜を聞へき心こそ
敵に逢ての勝を取へし

②⑤ 熱心のあらん人にはつたふべし
くらひ残すな大事なること

②⑥ 引も間よかゝる間とハ知なから
ぬかぬに切るハ非方なりけり

②⑦ 切結ふ太刀に姿乃かへらすハ
かたれぬまでもたのもしき哉

抑居合者奥州從林之明神夢想傳之
夫兵法者上古中古雖有数多此居合
末世相應之太刀手近之勝負一命之

写真②

抑居合者奥州從林之明神夢想傳之
夫兵法者上古中古雖有数多此居合
末世相應之太刀手近之勝負一命之
抑居合者奥州從林之明神夢想傳之
夫兵法者上古中古雖有数多此居合
末世相應之太刀手近之勝負一命之

有無極此居合恐於葉散邊土墾不審
之儀不可有之唯靈夢依所也尋此始
或時奧州林崎甚助謂者依兵法之望
林明神百ヶ日參籠滿曉夢中告云汝
以太刀常胸中憶持得勝怨敵云々
則如靈夢成得大利腰刀三尺三寸以
九寸三五勝表六寸而勝之妙不思儀
之極位一國一人之相傳也腰刀三尺
三寸者過現末之三心三身則三宝也
王法是爲三劔禪門有十八種劔六種
劔十二種劔亦是濟家宝中重代衲僧
截斷修行也殺人刀活人劔都在掌握
中脇指九寸五分者九品蓮葉劔出離
憂苦海中生死魔軍追倒釋道九曜五
古之內證也是則爲曹洞五位之秘訣
敵味方成事是亦前生之業感也生死
一軀而百戰場中便大舜光土地如斯
觀事現也

摩利支尊天之護身符也此居合千金
賜以不貴但於實當之人可傳附之兵
利心懸者晝夜思之祈神明之息得利
正見依心清身耳

畢竟默然良久云

珊瑚枝々撐着月

天真正

林明神

林崎甚助重信 写真(23)

田宮平兵衛照常

長野無樂斎權露

一宮左太夫照信

谷小左衛門季正

常井喜兵衛直則

浅利伊兵衛均祿

「浅利萬之助均費」



写真23 「林崎新夢想流居合」弘前藩の伝系。「浅利萬之助均費」の氏名は白紙（上部のみ糊付け）で掩われている。

抑居合雖爲劔術之儀旦者数年 写真24

被遂稽古且深志依不淺相傳之目錄

令授与畢此上者望之仁於有之者

御指南尤候仍許狀如件

「元禄十六癸未歲八月十二日」

當田流棒表之目錄

一、打搦 一、袖 一、こびん流 一、芝返

一、肘流

同棒裏之目錄

一、ゑり卷 一、小手流 一、車返 一、五月雨

一、小手搦

此一巻別而雖爲秘事依御執心不淺

令相傳畢聊鹿相他見有間敷者也



写真24 「林崎新夢想流居合」指南許狀の文言。「元禄十六癸未歲八月十二日」の期日は、紙片に書いたものをはりつけている。

當田流棒極意之卷

夫棒の水源を尋るに本来刃なきもの也

故に心得惡敷時は得利事なく偏振盲目

の杖に似たり然るに當田流棒六尺三寸也

半棒の時ハ三尺七寸五分の棒先に三尺七寸

五分の鍔(くさし)をつけ玉目三拾六文目の鉄の玉を

付るなり右いづれも前後左右自由に取廻し

能隨身時は六尺三寸の間より敵近よる事

あたわす然時にハ其利はかりなき也若敵

六尺三寸乃間よりちかく寄時ハ猶以利有第一

敵の轉變に随て得利事秘中乃秘也

一、実之棒 一、忍之棒 一、蜻蜒返 一、飛乱 一、惣まくり

半棒之大事

一、白刃取

鎖留之大事 写真 (25)

一、打留 一、捨留 一、大車 一、極意口上之事 口傳
傳 一、外物之事 口傳 一、無量口傳之事 口傳

迷故三界城 悟故十方空
本来無東西 何所有南北

右当田流棒之極意別而雖爲秘事被

遂稽古依御執心深相傳之卷物令授与

訖自今以後望之仁於有之者可有御指南

者也仍許狀如件

鵜戸大権現
ヨリ

當田二十五代

當田清源

當田内記

當田權右衛門尉

當田權太夫吉政

當田半兵衛吉正



浅利伊兵衛均禄

「元禄十六^{癸未} 歴九月廿四日」

當田流太刀表目錄

一、諸上 一、摺込 一 合車 一 合陰 一、糊付

同 裏目錄

一、合位 口傳 一、波返 口傳 一、芝返 口傳 一、芝返 口傳 一、波割 口傳 一、有二劔 口傳

同 中極目錄

一、外詔 七 口傳重々 一、鎧倒 口傳

但鎧倒一
替否

(紙片貼付) 一、飛違 口傳 一、鏑摺 口傳

一、柄取 口傳 一、玉簾 口傳 一、踏入 口傳 一、一足不去 口傳 一、蜻蜓 口傳 一、霞變 口傳

一、散シ^(ちら) 八 口傳無量

此一卷別 而爲秘事之間聊鹿相他見有

間鋪者也

當田流太刀許極意目錄

一、強盜切 左右口傳 一、車拔身 左右口傳 一、陰拔身 左右口傳 一、合柄取 二 口傳

一、清眼詰 二 口傳 一、無二劍 二 口傳 一、巖石落 取組 口傳 但取組二本 (紙片貼付)

二人詰 三

一、横聞 口傳 一、從入 口傳 一、無相見 口傳

鍔留 二

一、捨身劍 口傳 一、雷必劍 口傳

管鍔 五

一、諸管 口傳 一、丸橋 口傳 一、車劍 口傳 一、劍當 口傳 一、遊乱 口傳

以上

此一卷別而雖劍秘事不淺御執
心之間令相傳早聊麁相他見有
間鋪者也

當田流太刀許極意之卷

夫兵法之要者心行一致爲要者也
近世之劍術以木刀簞之輕爲速疾
之作欲已無難勝人矣或用種々
之幻術惑人有欲得勝者是非
劍術之實世人如是見奇變多
爲好之是愚至也此等之類常雖
爲奇於到實不可及者也是皆
其術高無實故也予家傳者爲
本實而無邪術也逢敵則無滯
如流水近倚而將替首股骨肉
本焉云爾

神妙劍

是者萬行祈禱秘術也重々口傳

一、第一當田流目付の秘事といつは^(一)

紅葉の目付なり一ツの目付とも日月

乃目付ともいふ也抑紅葉の目付と

いふハ敵の両眼を見る一ツの目付也敵乃両眼

を能見込時ハ縦敵いかやうに變し打懸ると

いふとも上下左右其變よく明に見ゆる

なり能見ゆる時ハ能變に應ずる

なり敵の變ずる色をよく見付その

色に付を紅葉の目付といふなり両眼

を月日といふ事有によりて日月の目

付ともいふなり

一、第二當田流の教入て極楽引地獄

首に股をかへ骨に肉を替るの教なり

然ハ敵に向て少しも退ことなく唯

身命をなけうつて深くふミ込敵

の太刀の鏑もと或ハこふしにてうた

るゝ覚悟専一なり打つほをはつ

れ鏑もとにて打るゝ時は肉も切る

る事なし然る時は利有如此の境は

諸流ともに口にはいふといへとも心

実に知人まれ也能々心得て執行有べし

一、第三劔術ひつきやうハ一心くろう

して利を得る事なし(たとい)緞いかなるもの

なりとも目に見へかたち有ものに

おゐてハみちに打砕き或ハかみひ

しき捨へきとおもふ一心たしかなる

時ハおのつから心おさまり驚事なく

心明なる故利をうる事也緞兵法

上手たりといふともおくるゝ心あり

てハ得利事なし能々工夫肝要也

一、陽位之事 口傳

一、二刀拔相之事 右同

一、鉄楯之事 右同

一、捨留位之事 右同

一、實手白劔取之事 右同

一、勝味位之事 右同

一、外物之事 口傳

一、組討之事 右同

一、無量口傳之事 右同

右之條々之不知位而向勝負事偏

似振盲目之杖右之位於鍛鍊者

勝負明也此秘術者鍛雖積千金

万寶兵法無執心不可深傳可秘

者也抑當田流兵法別而雖爲秘

事數年被遂稽古御執心不淺之間

相傳之卷物令授与訖自今以後望之

仁於有之者可有御指南者也仍

許狀如件

鶴戸大権現ヨリ

當田二十五代

當田清源

當田内記

當田權右衛門尉

當田權太夫尉吉政

當田半兵衛尉吉正

淺利伊兵衛尉均祿

淺利萬之助

管鍵 五

一、諸管 口傳

沓本め右之足前^{（後の意）}置左リ足跡^{（後の意）}置く顔^江突出し冠てすり又突候節前^而留後^江越^ス先付候^而終^{写真}

一、丸橋 口傳

式本め上段前^二開き敵^ハ脇突所ヲ三ツ張先付候^而終

写真20 「當田流太刀」の「管鍵五」の解説と最後の部分。

解説

一、車劔 口傳 三本め左り足前^二置^一老本めの通り受摺

り先付又脇の下突を前^二留^一後^三越^二シ又志て^一留^二すり先付終

一、劔當 口傳 四本め上段是へ左り足我か右之方^二踏^一

出し顔を突ときニツ成三ツなり共はり落先付また敵

突出スを前^二留^一すり先付終

一、遊乱 口傳 五本め老本めの通りしてつかう斗^二終^一

安永七^(一七七八)戊戌年十月十七日^六廿三日まで

傳文濟

(1) 當田流は、太刀(劔)、管鍵、居合、棒(術)を包含する武芸流派である。ただし、當田流の居合は、林崎新夢想流居合を指している。

本資料の「當田流太刀^井居合・棒極位卷」(折本)は、表題のように當田流太刀の他に、右の居合及び當田流棒(術)も掲載しているが、本稿に紹介することにした。

(2) 林崎新夢想流居合「高上極位之卷」。

「抑も此の兵術は、自己黙然として進むことなく退くことなく、左右また斯の如し。

唯是れ源に逢い、劔の刃上に到り、氷の凌上を走る。生死岸頭に於いて大自在を得、六道四生に向う。古人

云わく、世間の空は空にして佛性無し。空は空にして真に之を按ず。右の兵術是れ也。」

(3)

「秘歌の大事」の記述には「濁点」がないので、これを補って読む必要がある。

例①「千八品本草と聞しかど、どの病にとし^(想)らで詮なし」

(4)

「秘歌の大事」二十七首の次に「林崎新夢想流居合」の由来や特質に関する記述がある。

「抑も居合は、奥州林之明神、夢想より之を傳う。

夫れ兵法は、上古、中古より数多有りと雖も、此の居合は末世相應の太刀、手近かの勝負、一命の有無、此の居合に極む。恐るるは栗散刃土の堺に於いてなり。(こゝに)不審の儀有るべからず。唯靈務に依るところなり。

此の始めを尋ぬ。或る時、奥州林崎甚助と謂う者、兵法の望みに依り、林明神百ヶ日参籠の満暁、夢中に告げて云わく、汝此の太刀を以って常に胸中に憶持し、怨敵に勝ちを得る云々。則ち靈夢の如く大利を成し得たり。腰刀三尺三寸を以って九寸五分に勝ち、表六寸にして之に勝つ。妙不思議の極位、一国一人の相傳也。

腰刀三尺三寸は過現末の三心三身、則ち三宝也。王法是れ三劔と為す。禅門に十八種の劔、六種の劔、十二種の劔有り。是れ亦濟家、宝中、重代、衲僧の截断修行也。

脇指九寸五分は、九品蓮葉劔憂苦海中に出離し、生死魔軍追倒釋道九曜五古の内證也。是れ則ち曹洞五位の秘訳と為す。

也。

畢竟默然、良久しくして云わく、

敵味方と成る事、是れ亦前生の業感也。生死一体にして百戦場便ち^(すなわ)大舜光土也。斯くの如く観する事現^(世)

珊瑚枝々月に撐す。

(5) 林崎新夢想流居合「指南許状」の文面

「抑も居合は劔術の儀たりと雖も、旦つは数年稽古を遂げられ、旦つは深き志浅からず依り、相傳の目録授与せしの畢^{おわ}ぬ。此の上は、望みの仁之れ有るに於いては御指南尤もに候。仍^{なほ}つて許状^{くたん}件の如し。」

(6) 「浅利萬之助均費」の「」の意味は、一度書いた氏名の上に、白紙の紙片を貼付し、上部のみ糊付けしていることを指す。

(7) 「元禄十六^{癸未}八月十二日」の「」の意味は、この期日を別の紙片に書き、貼付していることを指す。

(8) 「當田流棒極意之卷」

「夫れ棒の水源を尋るに、本来刃なきもの也。故に心得悪しき時は利を得る事なく、偏えに盲目の杖を振るに似たり。

然るに當田流棒は六尺三寸也。半棒の時は、三尺一寸五分の鍔^{くさり}をつけ、玉目三拾六文目の鉄の玉を付るなり。

右いづれも前後左右自由に取り廻し、能く身に隨う時は六尺三寸の間より敵近寄る事あたわず。然る時には其の利はかぎりなき也。若し敵六尺三寸の間より近く寄る時は、猶以^{なほ}つて利有り。第一敵の轉變に隨いて利を得る事、秘中の秘也。」

(9) 當田流棒の「指南許状」の文面

「右當田流棒の極意、別して秘事たりと雖も、稽古を遂げられ、御執心深きに依り相傳の巻物授与せしめ^{おわ}訖ぬ。自今以後、望みの仁之れ有るに於いては、御指南有るべきもの也。仍^{なほ}つて許状^{くたん}件の如し。」

(10) 「元禄十六^{癸未}曆九月廿四日」の「」の意味は、(7)と同じ。

あとがき

寺山家所蔵の「當田流太刀」に関する伝書を、今回で一応紹介し終えることができた。ただ、今回の13、14、15の「戸田八十八」あての伝書は、本文でも触れたように、継ぎ足した料紙の部分から筆跡がその前の部分と異なるところから、資料上問題にすべき点があったと思われるが、今回は文面の紹介にとどめることにした。

17の當田流太刀解説之書は、たしかに貴重な解説の一冊ではあるが、記述者である「藤原豊貫」という人物を確かめることができなかった。當田流太刀の技法について解説のできる人物はそれ程多いとは思われないし、「安永八年（一七七九）」当時、成田兵右衛門総恒——堀口安兵衛胤清と同系統の人物を探し求めたが、遂に遭遇できなかった。

18「當田流太刀并居合・棒極意卷」は、表題は當田流太刀から書き出しているが、内容の順序はむしろ當田流太刀が最後で、居合（林崎新夢想流居合）から書き始めている。當田流棒と林崎新夢想流居合については次回に紹介する予定であったが、右の事情で触れないわけにかなかった。

居合には、微妙軽快な身体さばきと、それを可能ならしめる心法修得の必要があると聞く。「高上極意之卷」や「林崎新夢想流居合」の由来を説く文面には、この心法に関係あると思われる、そして自分から見ても難解な佛教語が頻出する。

また、棒術にも「迷故三界城 悟故十万空 本来無東西 何所有南北」などという禅語が出現し、これらの解明に、次回のことながら、あらためて自分の未熟な心底と貧弱な知識に不安を抱きつつ、この稿を収めることにする。